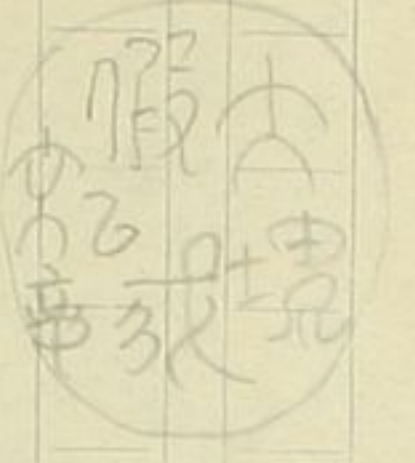


明和八年序

中史題答 蘆表紙

在月氏新本倍子

加彼而重耶止



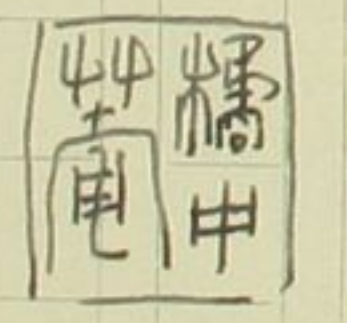
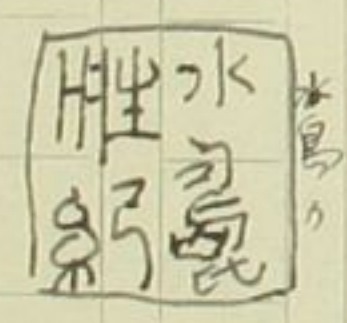
和氏の壁は五采をかさらす、はせをの箱は  
 句こと(源黄)に裸黄の飾をかさらす、云凡のこゝ  
 かさるやちまた及さる遠つ玉もふし言さあ  
 小と 睜うつり世かはるにしたかひ 珠珠に  
 たまをかさり、いろとりに彩をかさぬるか  
 如く、天下の仙凡牝時たり、そか中に我  
 師島酔は、ふかく昔をしたひ、其かさり不  
 きをとしころ門人に論せしか、三とせの

學燈社原稿用紙

さき 九原に去てかたし、今年この秋し  
 う 尾坊七条の僑居にしてあれハ人なけれ  
 ハ書なるおもあきを可佐里那止といふ。此  
 集にあらハし、杖頭にかけて詞友にあたり  
 、かゝるすしも信なきものハ説きとよ。  
 影ふ<sup>し</sup>ものには施さしと、我部のやとり近け  
 水ハ一書にしめされ侍る

橋中庵夢二書

明和辛卯七月



學燈社原稿用紙

極く淡く、  
 秋の意を  
 表す。



しり尾坊述



○鳥酔いへるこゝとあり 陸流にわするましき

ハさひしみの實也、おかしみに雅俗をわき

まへ、花鳥の風流をもと、すへし

○姿と情の事は道の大事也、姿を先として情

そのちにすへし、後にすへハ餘情なり、す

かたと、のひて余情のふかきを知へし、句

のちからも、作者の風流も、その深きあさ

きに顯るゝなり、

レ三才

學燈社原稿用紙



Faint handwritten text in vertical columns on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.



華の雲鐘ハ上野歎浅竹が

これに喰する時 花に對してのこゝろハも

とより穀撃肩摩の地を目のあたりには船も橋

も余情とそなれり 翁も情よりとハ申され

す 詩は有聲の画 画は無聲の詩 俳諧又

かくのこころ 枯枝の鳥に秋の暮を嘆し

木槿を馬に喰せて ほかなき姿をさためた

まひ けた君か代や蚊屋ハ蒲黄にきわまり

ぬ とありしを 月影やとし 五文字を居る

れしにもおもひ知へし 核 除塵花返 これ晚

學燈社原稿用紙

唐の工にして、唐詩明詩のさまとハことの  
ほかなりと何かし申されけり

○作にす、あへかうす一作は一句のちかう

たるつしす、む時は故歩を失し道にも

のうさこ、ろちつし

床に来て斲に入やきりくす

○自然といふハ私をいれさる也

造化之於自然則無言有形

言則求而不求是言之自然也

されはそ無分別のところに分別ありて申

學燈社原稿用紙





はあらし

○古詩古歌の意と一句にむすお事向上の一踏

にあそふか中に詩歌の高さをたかきにせる

の謂也 つかはるゝことなかれ 俳諧のち

かゝるをもて古詩古歌をつかひし

あか ー と日はつ水なくも秋の風

秋風吹將暮古道行跡稀  
や共微陽色射霜中衣

野を横に馬ひきおけよほととぎす

いたる(す)雲井なく何と何といきす  
物ひきおけてしたふ声か取

死人と、もに生活を同じうせんやうちもた

れへ句作りするほいかし  
古事をつかふも  
同じ事也

○歌にもふとく大なるあり  
ほそくかすいた

るあり えんにやさしきあり  
俳諧にもそ

のさまあり 人のこゝろは一日の盛衰且暮

あなしかうす ましへ春煉のさま 秋には

者と老をいほさるとありしもあへたる哉

翁のくさくさを感ずるに 古松のいつるこ

とく ふとさもほそき七 強弱とむにさ

あしみの舞あり 凡骨は翁の凡骨にしてあ

學燈社原稿用紙

學燈社原稿用紙

何ししま句作のみしたまほさりしを 猶も草む  
のみ

山里は萬歳逢し 梅の花

おとろひや歯に喰あてし 梅枝の砂

五月雨にかくれぬもや 瀬田の橋

這出よかひやか下の 蟻の聲

箱つまや岡のかた行 五位の声

蓑虫の音を聞に來よ 中の庵

恵比須講所うりに 袴きせにけり

ふるさとや 臍の緒もなくとりの 夏

學燈社原稿用紙

虫?

石

書の論に石に入事三分といふも 法を得

て躰を麦せさるは書家の奴たりとや 十人

か十人ばかり 翁ひらりを目蓄なりと 精

神をとりのし晋ふのこと葉又常なりす

木母寺に歌の金<sup>命</sup>ありけふの月 其角

臥處かや小萩にもる、鹿の角 去来

木つ、さの入まけりけり藪の松 丈艸

さみだれや視箱なるとふけりし 嵐雪

橘や定家つくえの還<sup>置</sup>ところ 杉凡

鴉の啼野中の杭よ神無月 嵐蘭

學燈社原稿用紙

44 芍薬よそ水か重いか萩の露

李由

うの花よそ毛の馬の飛明哉

許六

秋の田やけりつくして稗ニ俵

尚白

ひとつ葉のいと葉くや今朝の霜

又孝

おくりゆ<sup>火</sup>やうしろさありの袴にし

史和

わが楓奈いろになるも一さかり

曲翠

鯉の尾を提てたちけりとしの暮

正秀

ありあ明やむかりあさまるも一の華北枝

惟然

馬の尾に陽炎ちるや昼はたこ

智月

琴ひいて老を嗟せよ夕すゝ

智月



あしもとの菜種は臥てけしの花  
 茶を煮て廻す泊瀬の学寮  
 下張の及古之透くまくらして  
 火とほし(た)暮れは登る峰の寺  
 ほととさす皆啼仁舞たり  
 瘦骨のまた起直るちかくなき

七八

秋を猶泣く留人の妻

明るやう西も東も鐘の聲

さむうなつたる利根川の舟

あつかしや襟にさし込嫁の顔

硯法度と恵やせかるゝ

夜の雨窓のかたにてなくさまん

石町(輕)な水は無縁寺のかね

千細工に(輕)籠(著)ふとき艶眉



よ  
かへせともまけぬ小鯉

箱の葉のひのちからなき風

法心のはしめに趣る鈴鹿山

内巻頭かと呼声は誰

糊たちのにめ手のうつ葛のうら表

すんすとのひる男兄弟

一たはは江戸を足たかる小高ひ

学燈社原稿用紙

七  
分

十  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百



めしの中なる草をほる月

玉水の早苗と聞はは懐しや

我あとかうも鉦鞞うち来

山 伏を切こかけたる関の前

あうことし長櫓の萩

川越の歩にさし水行秋の雨

ねふといたかる顔のきたなき

学燈社原稿用紙





○	し	ら	を	坊	お	も	ふ	事	あり	色	蘆	翁	道	成	て	や	い
も	い	と	せ	に	近	く	俳	諧	に	古	人	な	し	と	あり	し	
ハ	貞	享	元	祿	の	さ	か	ひ	也	連	浪	翁	を	お	よ	ひ	
菜	ひ	／＼	行	に	そ	蘆	流	の	意	を	た	て	ん	と	せ	る	も
の	又	多	し	い	つ	水	翁	の	道	を	慕	ふ	な	れ	ハ	に	
く	む	に	あ	ら	す	と	か	む	る	に	あ	ら	ね	と	お	の	水
を	さ	き	と	せ	る	人	ニ	ろ	そ	傍	ま	し					
○	や	つ	か	れ	こ	と	し	北	國	に	節	を	ひ	き	あ	り	き
一	宿	一	飯	の	あ	る	し	に	對	し	て	も	翁	の	尊	き	を

ま

学燈社原稿用紙



なるべし。

○同しき国に半化といふものありふるとし

信中何某か家に蓮をあたしうせし渠も貞享

の集冬の日なりととも古調の名をよひて

世にあよほすむとすこれもおのれをさす

せむ類なるつし

○渠るか遊ふ仙語を古調とよひ 麥林使にみ

ちひかれしを麥調とよふ事 其國にて聞傳侍り

しか 伊勢の國に櫻良といふものありて 麦

水半化草とうなつき 俄に古風くといふあ

学燈社原稿用紙





ハ言出すよき句に似てあやしきは凡雅の

眾人なりとありしもおもひあたり侍る。

○半化かありの儘といふ集に

松枝に鳥のとまりけり鳥とまりとまるやとありてもく

ろしかるましと書りとまりけりなんをくるしかるま

し、一句の意をいふへし

○同じき集に其角性然露川支考よたりの各句

をあげ此人は蓬門の英雄なから一た

ひは此あやまちなきにしとあらず立同に甲と

とハるもあやまれりといひけたり、とりあす歌中哉數なる

学燈社原稿用紙

う	ち	誰	あ	つ	て	あ	や	ま	ち	な	か	ら	ん	さ	れ	と	一
た	ひ	い	と	書	る	事	一	句	の	ゆ	休	に	あ	ら	ず		古
へ	對	して	過	當	た	る	へ	し		又	予	も	あ	や	ま	れ	り
と	は	渠	に	此	の	ち	あ	や	ま	ち	な	か	ら	ん	や		ふ
と	し	や	つ	か	れ	渠	か	句	を	難	せ	し	も	數	多	し	
へ	す	く	も	過	當	た	る	へ	し								
○	あ	る	人	曰	中	こ	ろ	世	と	も	に	二	作	三	作	の	風
と	な	れ	り		そ	れ	を	一	洗	し	古	凡	を	振	興	せ	る
ひ	と	へ	に	標	良	麦	水	半	化	輩	か	ち	か	う	也	と	答
曰		二	回	三	五	の	ゆ	休	ハ	サ	モ	あ	る	へ	し		サ

學燈社原稿用紙

・	其	こ	ろ	作	に	す	、	み	し	人	く	ね	ふ	た	す	を	句
	羽	翼	と	し	勢	州	に	つ	夏	を	ひ	か	れ	し	時	の	喻
	こ	れ	ら	は	二	十	載	の	む	か	し	長	花	坊	夏	部	坊
	ひ	と	つ	象	の	灯	と	中	に	し	て	時	雨	哉			
	夜	あ	ら	し	や	幾	た	ひ	席	の	啼	直	す				
	蝮	の	す	む	教	さ	一	足	ゆる	清	水	哉					
	鶯	や	寝	る	時	は	寐	て	朝	ほ	ら	け					
	へ	き	既	鳥	醉	此	道	を	た	し	み	老	事	十	有	余	載
	も	の	と	て	も	深	が	た	め	に	何	と	し	て	裂	せ	ら
	お	も	ふ	へ	し	東	都	の	た	れ	か	れ	其	門	に	あ	そ

學燈社原稿用紙

二三

なりとうしろゆひせしもありしとおのく

かことき五七年のこにあらず

山峰をふきつけられし嵐かなしう尾坊

長くと腕にかけたり葛蒲夢

西務晴て蜘蛛の困白し竹の原

何として大名通る夜の雪

これよしあしの論にあらず 菟流の冬句た

了つしまして鳥酔の爪牙たる今の松露庵

鳥明今の鴨立庵百明東西に毫をふつて何

是門世本と大澤に隔すむ

學燈社原稿用紙

○人く短冊このみける時

おもいさる楮垣のうぢや落のとう

日や長さ親子紙漉くひとつ家

何なりとひと木ありたし磯情水

道端に篋干の菟の匂ひけり

やれ傘に嵐のつきし長夜か存

鹿啼てまことかましき旅痛哉

霜のあした卒都學一本倒けり

降雪や雀舞こむよし簾

これうをかいつけ侍るに今幸都の俳詠は

學燈社原稿用紙

専ら作たるをたのしむところ承りしこほ  
 快ほとり工夫しにやと答曰やつかれ天宮を丸  
 め松露庵中とよいれて何やうやく十年さ  
 れと鳥酔鳥明に右ひたりの答をあけりか  
 ある時ハ百明に導れみたりをもて師とせ  
 しかハはしめより色蓮流なりいたる時は  
 心藝あるたつり玉女を言出りかハ中に老  
 たるありて其おかし松露庵に日教とまり  
 しか鳥酔はたくえなると嫌ひた、自然をと  
 申されし今あむいまた水りとそ

學燈社原稿用紙

○ かくいひつゝ、けたれは 標良・麥水・羊化の

水車かならす我シマウとはらあしくせむ渠なも意を

たこんとせる器シマウなり 我も窪な流なのひこりな

小なり也 久る人胸なのものたくはへぬやつか

小たりとゆるし主な

○ 橋(橋中庵琴二)の庵号中が序なせることくかさりないとないしな題号

な小ハ 人を飾なり我をかなさらす 文をか

さらす、詞友なにふみして送なるべき趣なを都な七

茶なにあなりて書な書な

學燈社原稿用紙

△

二三才



句集之部抜取 (計三十三句)

春 (九十三句)

みやこのやうくへふみりて  
あぐれりや行脚の時うけ  
たまゆしくさくせ

鶯や 聞おれは けにはるの鳥

江戸 鳥 明

常にても 粥炊庵ぞ わかなの目

江戸 茶 居

七竹や 夜が 明た水は しの静

加賀 魚 文

梅さいて 笈にと さ小石のうけり

加賀 如 本

梅さくや 宮様 領の水の味

尾張 懐 羅

秋も 嘘と おもふ ありて

江戸 百 弁

木が 竹や 我 落は すと 詠し

江戸 百 弁

行ほと 大倉 佛や 春の 竹

江戸 左

学燈社原稿用紙

もろ角と病して鹿の行来我	野遊してながめやりけり春の鹿	春の野や葡萄子果に帆のあゆみ	畑うち芽よ衣か崎はいつこなる	謙訪の湖にて	誰も来てたかぬ門の柳かふ	かけろふや土つけて行馬の上	暁はさ水とつりれつ猫の意	轉人たろ泥になろろそはるのゆき	はる雨や杉の霞たはる森の中
上州 沢田 維	伊豆 五 蓬	下總 百 維	信州 左 十		京 諸 九	上州 雲 浪	上州 春 路	信州 太 燕	信州 柴 雨

学燈社原稿用紙

夕	凡	か	り	そ	め	の	水	に	も	さ	わ	く	蛙	か	な	相
か	り	そ	め	の	水	に	も	さ	わ	く	蛙	か	な	相	中	明
未	て	之	小	は	た	し	か	な	七	の	や	お	ち	の	花	柳
未	て	之	小	は	た	し	か	な	七	の	や	お	ち	の	花	柳
山	あ	き	の	花	の	さ	め	り	の	ま	り	葉	か	な	野	冬
山	あ	き	の	花	の	さ	め	り	の	ま	り	葉	か	な	野	冬
橋	落	て	小	鮎	お	と	ろ	く	浅	水	哉	祖	如	伊	之	明
橋	落	て	小	鮎	お	と	ろ	く	浅	水	哉	祖	如	伊	之	明
こ	と	た	く	ぬ	回	り	の	波	の	立	る	か	な	徐	末	楚
こ	と	た	く	ぬ	回	り	の	波	の	立	る	か	な	徐	末	楚
肩	に	も	の	ゆ	め	て	還	り	さ	く	ら	花	入	越	前	楚
肩	に	も	の	ゆ	め	て	還	り	さ	く	ら	花	入	越	前	楚
か	し	こ	に	は	人	聲	の	あり	山	櫻	柳	陰	川	兄	川	楚
か	し	こ	に	は	人	聲	の	あり	山	櫻	柳	陰	川	兄	川	楚
と	似	枝	の	言	の	す	か	也	花	さ	あ	り	柳	陰	川	楚
と	似	枝	の	言	の	す	か	也	花	さ	あ	り	柳	陰	川	楚

学燈社原稿用紙

ゆくはるや白雲  
つとりにあし  
まる、  
箕山

行春や水はひり  
へなり小川  
吳郡

夏 (言十二句)

濯佛や旅を  
送たる天の  
もしす  
江戸  
石  
明

百明は卯月の旅  
てかろした  
ものぞ、  
我長途に對  
中越水けり

濯仙や卯の花  
かさす里わ  
く、  
下総  
徐舟

夏秋や  
日は暮涼  
て鳩の  
敵り  
江  
水

ふハ  
とのみ  
朴の  
木のか  
葉裁  
越後  
一  
主日

薄の衣  
かこして  
あそぶ  
魚は  
何  
香小  
既  
白

南天に  
笠さ  
りて  
啼  
蚊  
かな  
信  
路  
因

学燈社原稿用紙

しほしむと辰をもとのた水は  
情あつ隣にきてせにつる、  
夕暮のさまそあけ

下 高やかりやくにく木— 葎の茎  
し  
ろ  
尾

ねろく— 峠の峰を同口かな  
あ  
ま  
屋

早乙女の裏はころみて暮にけり  
あ  
ま  
暮

ゆふ鳥や井戸の車— およみ—  
あ  
ま  
鳳

眼病よくなうける時

石菖の匂りす— き夜明かな  
あ  
ま  
上

松の葉落て地にたつ暑哉  
あ  
ま  
律

学燈社原稿用紙

秋 (六十九句)

猿亭のやとに聲ありけさのあき

に戸 門 秘

秋たちね 暎の白く夜半かな

古 棟

ほし合や二夜とらくハあらしも

二日 坊

赤土の日記 静けし秋の山

か 仙

臆暗夜の影も 一葉にかりけり

麦 法

きさめほにろかろくくや 破小垣

カチ 小の 女

野を逃て 佛の膝やさうくす

上 雨 林

秋風や鷹に裂る、鳥のこゑ

暁 基

学燈社原稿用紙

言望にて

夕露に秋のあしきとよむ日哉

朝露や木のうにたるい 蚊の困

や~~~~~と滞り居りさんけあの月

明月や何そ向たき 嶋の人

露たつち箱は逆さ 猿の聲

秋ゆくはたね入替へ 行秋そ

冬(七十句)

初朝の朝猿の鼻ふさの何や之

しくる、や日に幾たい 秋(数)浮御堂

学燈社原稿用紙

麦

吟

尺

雲

弄

半

辛

古





不寐 三章

わらわねハものおとさう

くまこを仍てまくらになつむ

夜長 さやとこも替す又たて出

建仁寺の蒲半ほ子の刻よ

一をのそく多死にすみ

卯の刻を百八の敷の終とす

ほとーすすの啼ころすま

かやしき物状なるものを

煉の夜やわすけさせてはたらくに鐘 (陀羅尼鐘)

四十にちかき身のものにと

半邊(一)

中夜中の荒蕩さ

しんを通す

産鬘のふるさと遠く夜寒おな

ろ尾坊

かく山縣さりし夜もありしとおみのほしに申

送りけ小は聲聲聲聲空空の空おもひわりぬとて

雨石三机如毛雲帯松尾楚川あたくのすきも

学燈社原稿用紙

*[Faint handwritten text on the right page]*

のより三の歌仙となし我をなくさめり、こ  
たひことしけくてもうす故園へ帰るはあ  
ほつかわさ記行をと筆とり置た小本。其こ  
ろともには梓にあく外すし。

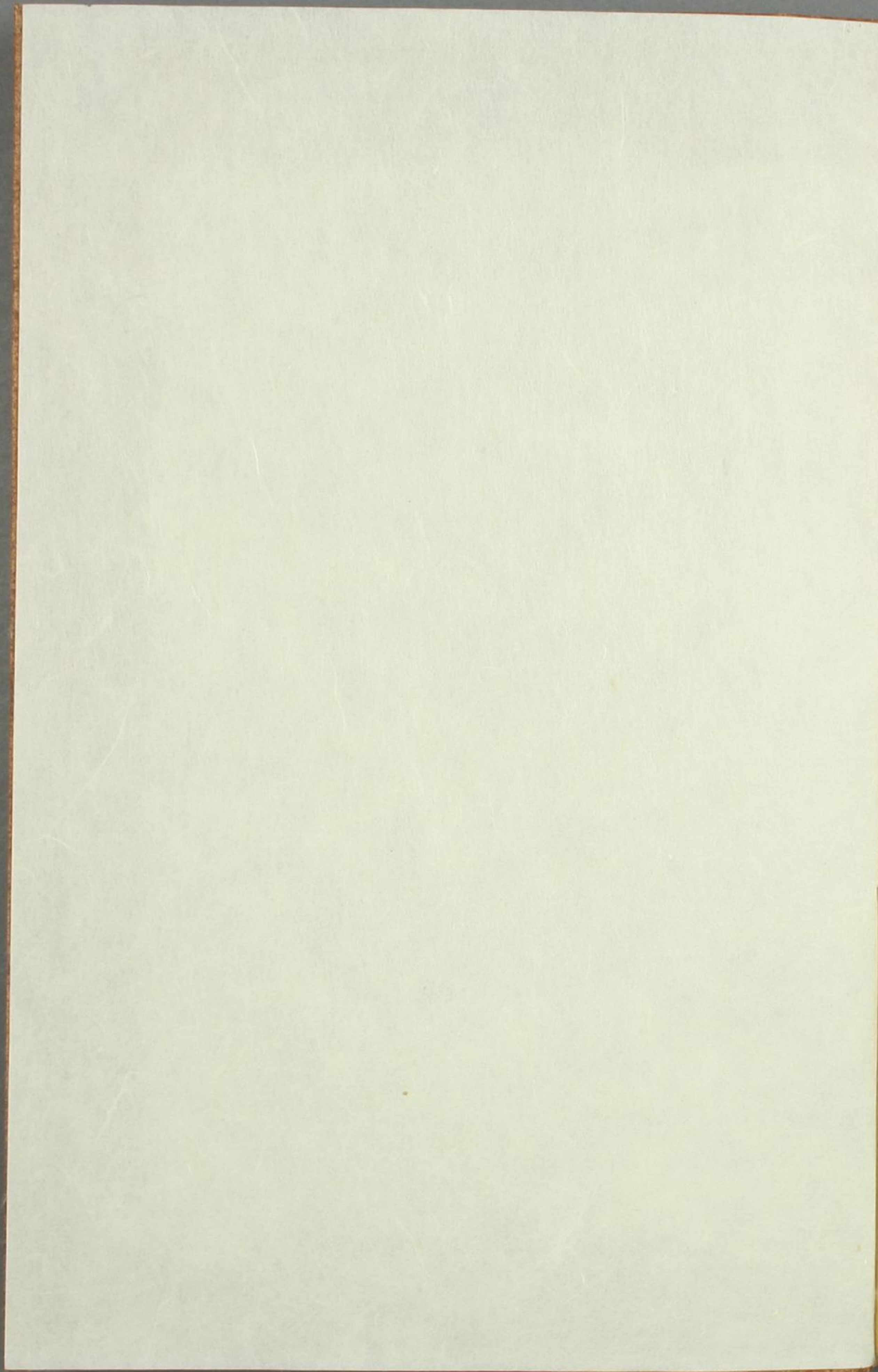
東の御書用

高寺町ニ住ト所

橘屋治兵衛

三十六終  
(内序三丁)

学燈社原稿用紙



Handwritten text in vertical columns on the right page, written in a cursive style. The text is arranged in approximately 10 columns, with the rightmost column being the most legible. The characters are dark ink on aged paper. The text appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. Some characters are difficult to decipher due to fading and the cursive nature of the script.

